

中間報告 ミュンスターベルク文庫再構成の試み

Interim Report: Reconstruction of the Book-Collection of Oskar Münsterberg

小川 知幸

1. ミュンスターベルク文庫について

附属図書館本館所蔵の「ミュンスターベルク文庫」は、ドイツの東洋美術史家オスカー・ミュンスターベルク (Münsterberg, Oskar, 1865 - 1920) の旧蔵書とされており、『東北大学五十年史 下』(以下『五十年史』とする)によれば、「『国華』そのほか本館所蔵図書と重複するものを除いた全体の約六割にあたる洋書 730 冊と和漢書 78 冊からなる」ということである¹。しかし、同文庫は、受入・整理のさいに、一括排架ではなく、「第

二特殊文庫」として排架されたという。第二特殊文庫とは、「一般の図書と同様、ひとつひとつ分類して、それぞれの書棚に分散させたもの」である(『五十年史』)。つまり、文庫とは名ばかりで、現状では(まだ)、「ミュンスターベルク文庫」は、本館地下書庫 1F 旧分類に一般図書とともに混排されており、冊子体の目録はなく、OPAC の登録等でも、その所在を確認することは困難である。

2. 再構成の発案

ところが、2011 年(平成 23)ころから、しばしば外部から「ミュンスターベルク文庫」の利用者が訪れるようになった。上記の理由により、カウンターでは職員による出納ができないため、参考調査係において対応するか、あるいは、協力研究員が利用者の入庫や書架検索等においてたびたび協力を要請されてきた²。

たしかに、『新訂貴重図書目録洋書篇』によれば、「ミュンスターベルク文庫」からは、すでに 15 点が貴重図書への指定済みとして記載されており³、その他にも貴重

な資料が複数含まれているであろうことが推測される⁴。そこで、2016 年(平成 28)1 月ころに村上康子・情報サービス課長から、それらを探索し、将来的には他の個人文庫と同様にそれらを一つにまとめて排架するのが適切ではないか、との発案があった⁵。これを受けて同年 3 月より、第二閲覧係(現・貴重書係)に配置された古典籍コンシェルジュ 1 名を、とくにこの事業の専任とし、協力研究員がこれをサポートするかたちで、ミュンスターベルク旧蔵書の探索が実質的に開始された。

1 『東北大学五十年史 下』東北大学, 1960 年, 1731 頁

2 そのなかで、利用者からミュンスターベルクの旧蔵書の貴重性を指摘されたり、保管の改善を要望されたりすることもあった。ただし、保管法については、時期的に震災後の復旧や改築などが続き、書庫の環境が安定しなかったことも一因であろう。

3 『新訂貴重図書目録洋書篇』東北大学附属図書館, 2004 年

4 この利用を含めたご研究により、南明日香・相模女子大学教授は、2015 年に『国境を越えた日本美術史 ジャポニズムからジャポノロジーへの交流誌 1880 - 1920』を藤原書店から出版され、本書により第 36 回ジャポニズム学会賞を受賞されました。

5 正式な名称は「特殊文庫」であり、附属図書館では、とくに個人名を冠した特殊文庫を慣習的に「個人文庫」と呼称している。かつて存在した「第一特殊文庫」「第二特殊文庫」の区分が用いられなくなったためとおもわれる。第一特殊文庫とは、「内容を分散させないで、一括して書庫の中に別置されているもの」(『五十年史』)であり、すでに『図書館利用ハンドブック』(東北大学附属図書館本館, 1974 年)では、たんに「特殊文庫」として、第一・第二の区別をしていない。ただし、そのなかで、「一般図書のなかに分類配架されているもの」として、『五十年史』のいう、第二特殊文庫のいくつかの名称も挙げているので、おそらく、それらもまた「特殊文庫」のカテゴリーに含められていたのである。時期的にみて、1972 年(昭和 47)に附属図書館が片平から現在の川内南キャンパスに移転したときに、その区分が消滅したのだろう。

特殊文庫(個人文庫)の成立にかんしては、小川知幸(学会発表)「特殊文庫はいかに作りあげられたか ドイツと日本、大正・昭和初期の東北帝国大学附属図書館」, みのくろ図書館情報学研究会, 2017 年 7 月 9 日, 於東北大学, また、小川知幸(学会発表)「東北帝国大学附属図書館の蔵書形成 ミュンスターベルク文庫再構成の試み」, 日本図書館文化史研究会, 2017 年 9 月 17 日, 於山形県立米沢女子短期大学, さらにその予稿集を参照。

なお、発案の経緯から明らかなように、この事業は附属図書館本館情報サービス課の統括するものであることを付言しておく。

3. オスカー・ミュンスターベルクについて

ここでオスカー・ミュンスターベルクとは何者かということについて簡単に触れておきたい⁶。ミュンスターベルクは1865年、現在のポーランドに位置し、当時はプロイセン王国領であった港湾都市ダンツィヒ（現グダニスク）において裕福な家庭の子として生まれ、その地のギムナジウムに通った後、ミュンヘン大学とフライブルク大学において経済学と美術史を修めた。フライブルク大学に提出した学位論文のタイトルは、「1542年から1854年までの日本の貴金属貿易」であった。1906年、ベルリンでリベラル派のドイツ国民新聞（Deutsche National-Zeitung）の主事となり、その後、会社経営のためライプツィヒに移ったが、1912年にはベルリンに戻り、大手の印刷会社ハーゲルベルク（Hagelberg AG）の取締役となった。その間、主著となる『日本美術史』（3巻、1904 - 1907年）、また『中国美術史』（2巻、1910 - 1912年）を刊行した⁷。その他にも、多数の著作、論文を発表したが、王立プロイセン美術館・東洋美術コレクション部門の初代館長となったオットー・キュンメル（Kümmel, Otto, 1874 - 1957）率いる東洋美術史の主流派には与せず、あくまでフェノロサ流の包括的な叙述を貫いたとされる。したがって、オスカー・ミュンスターベルクは、印刷会社の経営のかたわら、終生ディレクターの美術史家として活動したのである。

1914年8月、ドイツはロシアに宣戦布告し、第一次

大戦が勃発する。それからおよそ4年後の1918年11月には停戦協定が結ばれ、翌年5月に提示された莫大な賠償金支払いを含む講和条件はドイツ国民を震撼させたが、同年6月にはこれを受諾、ヴェルサイユ条約が調印された。当時のミュンスターベルクの日記が残されており、そこには次のように記されている。

「1919年5月8日 今日はこの戦争のもっとも暗い日だ。ヴェルサイユ平和条約のことだ。あらゆる生きる喜びを拒絶し、心臓を止めるものだ。勝利した敵国が、あまりに無慈悲なかたちで、「無残なるかな、征服されし者は（vae victis）」と布告する。なおも不可解におもわれるのは、そのような平和が実現されるだろうかということだ。ありえない。しかし、ではどうすれば？ まるで破滅を免れることは不可能であるかのようだ。

（中略）光は見えず、ただ暗い雲だけだ。何のための人生か。」⁸

1920年4月にミュンスターベルクは失意のなかで急逝した。しかし、このような絶望感が多かれ少なかれドイツ国民の大半に共有されていたものでもあっただろう。その後、妻ヘレンは再婚して遺産を処分し、アメリカ合衆国へと渡った⁹。ミュンスターベルク旧蔵書の売り立ては、ベルリンの美術商パウル・グラウペ（Paul Graupe）によってなされた¹⁰。

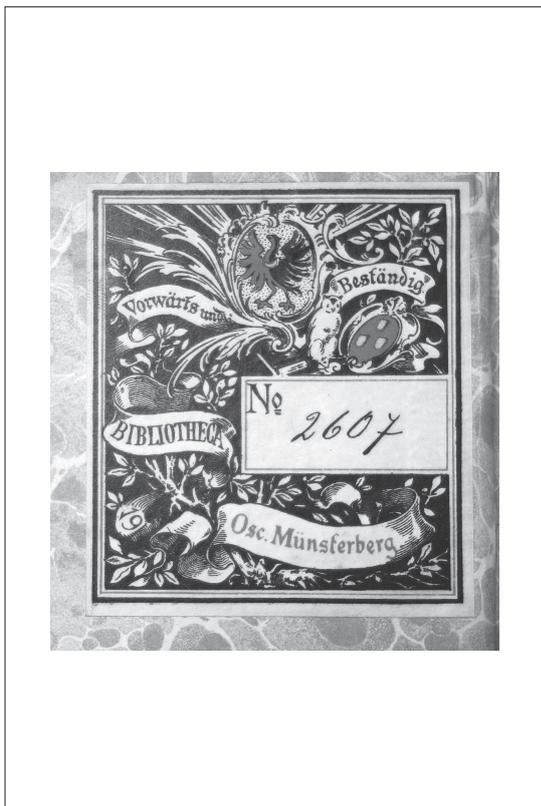
6 Gert Naundorf, "Münsterberg, Oskar", in: Neue Deutsche Biographie 18 (1997), S. 543 f. また、ミュンスターベルクとキュンメルの発想の違いについては、安松みゆき「ドイツ近代における日本美術観 東洋美術史家ミュンスターベルクのキュンメル批判を基にして」『別府大学紀要』第53号（2012年）、39 - 49頁を挙げておく。

7 Japanische Kunstgeschichte, Braunschweig, 3 Vols., 1904-1907; Chinesische Kunstgeschichte, 2 Vols., Esslingen, 1910-1912.

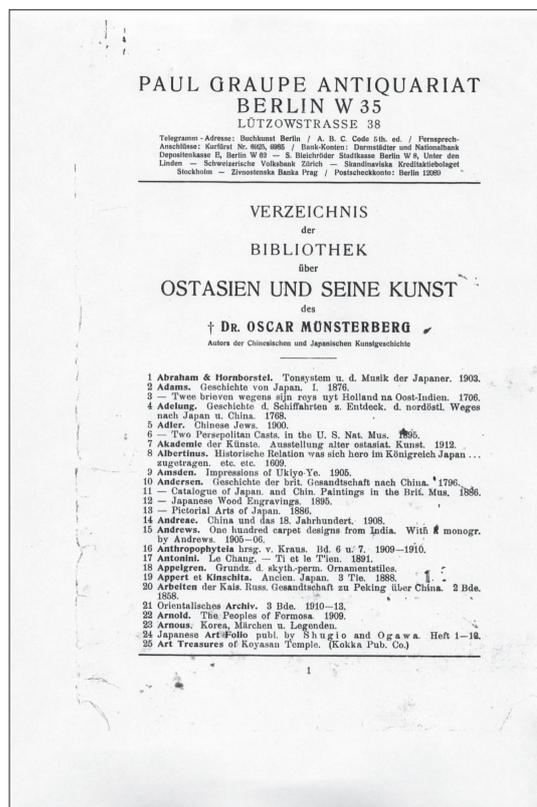
8 Oskar Münsterberg: Versailler Vertrag, in: LEMO (Lebendiges Museum Online) <https://www.dhm.de/lemo/zeitzeugen/oskar-muensterberg-versailler-vertrag.html>

9 南明日香, 上掲書, 138頁

10 売り立て目録の小冊子が残されている。日付は不明だが、夫人再婚後の1924年ころのものとおもわれる。



ミュンスターベルク蔵書票



売り立て目録

4. 事業の進捗

以上がミュンスターベルクの略歴であるが、蔵書の売り立ては、当時の東北帝国大学法文学部の初代教授の目にとまり、1925年（大正14）ころに購入、受入れの運びとなった。そのような、ドイツ人研究者の旧蔵書購入から附属図書館における特殊文庫の成立までの経緯にかんしては、別稿を準備しているので、さしあたりはそちらに譲りたい。

さて、ミュンスターベルク旧蔵書には、オスカー自身によるオリジナルの蔵書票が貼付されていることから、当初はこれを符牒として、ジャンルや装丁に表れる年代的な特徴をもとに探索を続けた。売り立て目録はあったが、書誌の取り方が恣意的であり、使用に耐えなかった。やがて、ミュンスターベルク旧蔵書であっても、蔵書票の貼付されていない資料が多数存在することがわかってきた。また、コンシェルジュが一般図書より抜き出した資料がOPAC未登録であったことや、図書情報係から大型ポートフォリオ（紙挟み）形式の資料約10点資料の確認をもとめられ、協力研究員がこれを調査したところ、ミュンスターベルク旧蔵書と判

明したこともあった（2016年11月）。

その後、コンシェルジュも二代目となり、東北大学大学院文学研究科博士課程在籍中の遠藤直子氏（古代ローマ史）がこれを担当している。サポート役として、貴重書係の須田洋子係員も原簿に当たるなどしてこの事業に加わった。その調査の過程で、ミュンスターベルク旧蔵書には、丸善等が仲介し、原簿上、数度にわたり受け入れられていること、また、受入れ後に重複等の理由により、他大学等に売却されたものがあることなどもわかってきた。

そこで、実地ではなく原簿上で、旧蔵書と確定した資料の前後の受入れを集中的に探索することで精度を高めることにした。いうなれば、素潜りで魚を銜て突くのではなく、船上で魚群の影を見ながら網を放つことにしたのである。さらに、このような探索法を続けるうちに、カード体目録の一部に、「Münsterberg Bib.」（ミュンスターベルク文庫）と表記されたものが存在することが判明した（2017年5月）。

さらに、同年2月には、オランダの旅行家にして貿易

商であったリンスホーテン (Linschoten, Jan Huygen van, 1563 - 1611) の『東方案内記』ドイツ語初版 (1598 年) がミュンスターベルク旧蔵書 (排架記号 VA/2/B29 登録番号 21395) のなかから発見され、貴重図書として推薦された。この資料については本誌別稿にて紹介する¹¹。

現在は、コンシェルジュがそのようなカード体目録の所在を探索し、コピーをとって貴重書係に保管、蓄積している。この作業が一通り終了すれば、次の段階で、それをもとに実際の資料を探索し、突合する予定である。

平成 29 年 (2017) 11 月 6 日現在での探索結果は以下

の通りである。ただし、その数値は OPAC 上で「本館書庫 BF1 ミュンスターベルク文庫」に所在変更済みのものとする。

和書：20 点 (54 冊)

洋書：414 点 (529 冊) うち雑誌扱い 14 点 (43 冊)

そのほかに、

貴重書指定済 (洋書)：18 点 (25 冊)

古典目録作成中 (和古典)：6 点 (8 冊)

5. むすびにかえて

以上のように、およそ 1 年半の期間に、洋書 730 冊のうち 554 冊、和漢書 78 冊のうち 62 冊を発見することができた。その他にカード体目録から推定される資料が約 100 点ある。したがって、すでに全体のおよそ 90 パーセントが探索されており、「ミュンスターベルク文庫」を再構成する日も近いといえる。

しかしながら、作業を続ける上で、いくつかの問題も予想されるので指摘しておきたい。まず、「Münsterberg Bib.」の表記のあるカード体目録は、カードボックスのあちらこちらに分散して収納されているので、すべてのカードを収集し尽くすことはおそらく困難であろう。そこで、『五十年史』の記述にある冊数を目安に、その近似値で作業を終了せざるをえないとおもわれる。ただし、『五十年史』の数字がはたして本当に正確なものかどうかはわからない。

また、その後の資料との突合においても、長期貸出しや研究室備付であればまだしもだが、資料のいわゆ

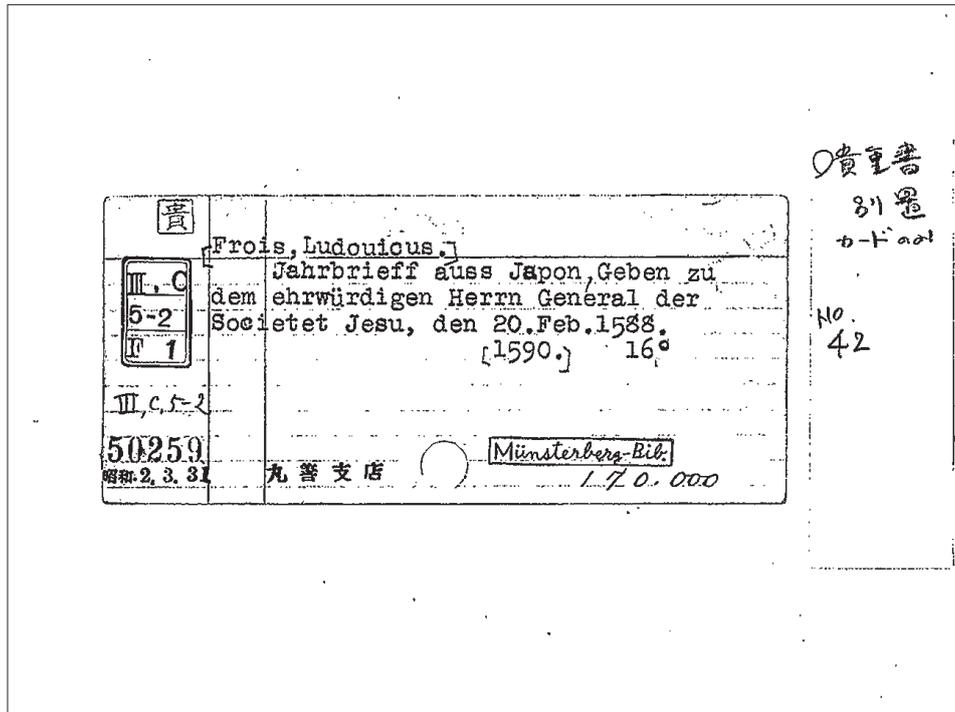
る「行方不明」と遭遇する可能性は残されている。その場合は、検索に多大な時間とコストが必要になる。

もう一つ、このようなカード体目録を追跡する方法は今のところ洋書に特化されているので、和書の検索には別の方法を考案しなければならない。あるいは応用が効くかもしれないが、この問題にたいしては、和書に造詣の深い協力研究員との連携をあらためて図りたいと考えている。

同時に、購入と整理の経緯や、一部資料の売却等にかんする問題を考究しておくことが望ましいだろう。

最終的には、ミュンスターベルク文庫のために書架を確保し、資料の状態に応じて対策や修復を施した上で、一括して排架するとともに、目録を備えるまでをこの事業の到達点としたい。

(おがわともゆき、学術資源研究公開センター助教・
附属図書館協力研究員)



カード体目録



仮置き中の「ミュンスターベルク文庫」

